様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５３１０５５

研究課題名（和文）国際家族における教育戦略形成過程とそのメカニズムについての実証研究

研究課題名（英文）A Study of Educational Strategies of Chinese Families in Japan

研究代表者
周　飛帆（Zhou, Feifan）

千葉大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：８０２７０８６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、在日中国人の家族に対する継続的な質的調査を行い、異文化適応過程における教育戦略の形成、葛藤場面における資源の活用と調整、家族の教育機能を維持と再構築を、実証的に考察したものである。主な成果は①日本文化の受容には積極的、②中国的、日本的なものを固定的に捉えておらず、非中国的＝日本的なものを象徴的に捉える傾向がある、③言語の習得に道具的意識が働き、④学校段階が進むにつれ中国語や中国的なものについて固着する親の影響が次第に弱くなる、⑤親の言語能力、価値志向、社会関係資本の多寡が進路選択に関係する、⑥教育をめぐる家族関係の調整は問題解決型であり、長期的な展望は親の将来計画と相関する。

研究成果の概要（英文）：This study is based on qualitative survey toward the Chinese family living in Japan.The followings are the research objects.1formation of the educational strategy in the process of cross-cultural adaptation.2utilization and adjustment of social resources in the conflict situation.3. maintenance and reconstruction of the educational function of the family (home education)
The study results are as follows.1.Chinese families living in Japan are1.positive for accepting Japanese culture,2.tend to regard the “unknown” as Japanese culture,3.granted language as tool.4. The parents’ influence on the matters related to China is getting weaker through their child’s grade getting higher in school.5.All the parents’ language skills, sense of value, social capital are related to their child’s career decision making.6.Short-term educational strategy for problem solving, and the long-term educational strategy has a large impact on where the family lives

研究分野：教育社会学

キーワード：異文化適応　家族構造　中国人家族

１．研究開始当初の背景

日本文化・社会に対する外国人の適応について、これまでの研究は個人レベルの心理的受容及びコミュニティレベルにおける同化と差異化が中心であった。家族を視点とした数少ない研究においても家庭内における母国文化と、家庭外部における異文化＝日本文化という図式（側面）に注目していることが多い。それは家庭に対する調査は一般的に困難であることに起因し、ほとんどの先行研究は短い期間に一回または少数回の調査に基づいて分析しているからである。しかし、それでは家族関係の可変性、流動性という視点が抜け落ち、特に社会的・文化的環境に適応していく過程で家族の内部構造が大きく変わる外国人(移民)家庭の特質を見落としていると言わざるを得ない。

本研究は、長期的質的調査を通して、異文化適応における家族関係の変容過程を明らかにし、子どもに対する教育の目的、意識及び活動の詳細を追うことで調査研究をデザインした。

２．研究の目的

本研究は、中国人を中心とした国際移動家族を分析対象として、異文化適応過程における家族内部構造の変容を、子どもに対する教育戦略に焦点化し、継続的インタビュー調査を手法とした実証研究である。主な研究目的は以下の通り。

① 家族における教育機能の働き、意図的な戦略形成は不変的なものでなく、ライフイベントや家族内部の構造変容によって絶えず調整しながら維持されるものである。特に文化を跨って移動する家族においては、個々の家族メンバーが異なる文化に対する適応が要するだけでなく、家庭における受容も大きな課題となる。異文化との相互作用において家庭という「カプセル」がどのように変容し、また調整をするか、事例を中心に分析・考察する。

② 「華僑華人」世代の中国人移民は独自の人的ネットワークを構築し、また中国社会や文化に対する依存も強かった。こうした従来型の移民に対し、属性、来日ルート、言語能力など様々な面において異なる「新来」中国人はどのような特徴を持つかを明らかにする。

③ 国際結婚や在日外国人の家族に対するこれまでの先行研究では、日本志向対母国志向、向学校対反学校のように二項対立の軸で考察することが多い。しかし、異文化環境における家族のエスニシティは、決してそのような単純な図式で測れるものではない。「異なる」文化や価値観にどのように認知し、また自らのアイデンティティーを保持するためにはどのように差異化や再生産するかを実証的に分析する。

３．研究の方法

研究当初では、両親がともに中国人である「在日中国人」家族に加え、両親がインド人である「インド人家族」、片親が日本人である国際結婚家族を「国際家族」と定義し、それぞれの家庭において子どもに対する教育にどのような意識、戦略を持ち、また様々な葛藤場面においてどのように家族の意見を調整し、社会的資源を動員して問題を解消するかを目的としていた。

研究が進むにつれ、上記の研究目的に一部変更を加えた。その内容と主な理由は次の二点にまとめることができる。まず、上記の当初予定の三つの調査対象からを中国人、インド人家族を平成 25 年度以降、主たる対象から外した。代わりに中国人家族の範囲を拡大し、在日中国人家族だけでなく、北米に渡った中国人 2 家族、来日してしばらく後に中国に帰国した中国人家族 3 家族を新たな対象とした。理由は a 初年度の調査によってインド

人の家族に対する調査は一定量を確保することが難しかったこと、b 日本社会や家庭教育に関する理念においてグループ間の差異を見出すより、同じ中国人で構成される家族において教育戦略を構築するプロセスをたどる方が課題解明により貢献できると考えたからである。事実、この修正は一定の効果があった。

次に、研究の枠組み構築においても若干の更新を試みた。家族社会学の先行研究をベースに、異文化適応における家族内部構造の変容を焦点として、教育に対する意識や家庭における教育的な機能を考察のポイントとした。調査を進めている内に、より大きな枠組みの構築が必要と感じた。例えば、日本文化・社会への適応は確かに（中国人）国際家族にとって大きな課題であるが、その障害となっているのは中国文化と社会に対する距離「感」であることが新たに分かった。つまり、ほとんどの調査対象は日本語能力の向上とともに日本社会への理解を深めることにさほど抵抗を感じないのに対し、この適応を「同化」と捉えるようになると、中国における居場所やはく奪される疎外感にさいなまれることもしばしばである。そうしたことから、近年中国における社会変動の分析を新たに組み入れ、そこから都市農村の人的移動と国際移動との相互関係をオーバービューする研究が生まれた。

上述のような修正を加え、延べ 17 家族 28 人に対してインタビュー調査を行った。調査は半構成質問法によるもので、平成 24 年度、25 年度に第一回の調査を行い、スノーボール方式で調査対象を拡大した。平成 26 年度には継続調査を承諾した対象者に対して順次に二度目以降の調査をし、中では親と子を別に調査した家族もあった。

４．研究成果

本研究において得られた主な成果と知見は、以下のものである。

① [家庭における文化受容]　調査対象となる中国人家族では、移住先の文化に対する心理的な抵抗と拒否はほとんど見られなかった。日本的な価値観、行動様式に対する好意的な見方から、日本での生活が長期になるにつれ積極的に言語・文化を受け入れる必要性や中国的なものに対する批判に至るまで、述べられた理由は様々であった。この傾向を一般化するにはさらに検討が必要だが、少なくとも今回の調査対象のような、学歴が高く、差別体験も比較的に少ないグループの共通した特徴だと指摘できる。

② [文化を象徴的捉える]　一方、家族関係において問題が発生した時には、文化の異質性に原因を求める傾向も確認した。一見すると、前項に述べた異文化に対する寛容性とは矛盾しているようだが、実は「寛容性」と「選択的排除」は表裏一体となって家族のソリダリティを維持している部分がある。つまり、衝突場面において、家族の情緒的機能を維持するために、メンバーは例えば非中国＝日本という考え方をすることで、文化を象徴的に捉え、またそうすることで家庭における中心的な価値観の共有を維持しようとするものである。

③ [道具的意識]　家庭におけるエスニシティの維持活動は多くの側面に確認できる一方、言語に関しては道具的意識が働く。つまり、子どもの中国語能力を維持する活動はほとんどの家庭において行っているが、それが中国人としてのアイデンティティーを維持する明確な目的意識というより、道具的に用いる能力の一つとして考えることが多い。一部の家庭では、国籍に対しても同様な考え方が見られた。

④ [教育戦略の調整]　家庭に行われる教育活動は、家族の内部構造、親子関係のタイプによって異なるが、子どもの教育校

段階が進むにつれ中国語や中国的なものについて固着する親の影響が次第に弱くなるといった共通した特徴を持つ。また親の言語能力、価値志向、社会関係資本の多寡がそうした教育活動の実施に深く関連するだけでなく、特に進路選択に強く影響する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 周飛帆「社会融合視角下的都市移民」、国際教養学研究（千葉大学国際教養学部紀要）、査読あり、創刊号、2017、39-55 頁

〔学会発表〕（計　2　件）

① 周飛帆「都市化における国内移動と国際移動」、日本華僑華人研究学会 2015 年次大会、2015 年 11 月 14 日、於京都大学

② 周飛帆、「国際移住家族の問題構造とその分析枠組み」、第三回中日韓朝言語文化国際シンポジウム、2013 年 8 月 17 日、延辺大学（中国延吉市）

〔図書〕（計 2 件）

・房総日本語ボランティアネットワーク編、周飛帆、エイデル出版、「千葉における多文化共生のまちづくり―広がるネットワークと子どもに対する支援」、2015 年、285 頁（20-28 頁）

嶺井明子編著、姜英敏訳、周飛帆、広東教育出版社（中国・広州）、「全球化時代的公民教育―世界各国及国際組織的公民教育模式」、2012 年、210 頁（163-195 頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
周　飛帆　（ZHOU feifan）

千葉大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：80270867

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）